

開発途上国との国際交流から得た学生の学び

—カンボジア・スタディツアーの教育効果—

岡 宏美¹⁾*・岡本 直行²⁾・杉本 幸枝¹⁾・岡本 亜紀³⁾・矢藤 誠慈郎⁴⁾・古城 幸子¹⁾

1) 看護学科 2) 幼児教育学科 3) 香川県立保健医療大学 保健医療学部 看護学科

4) 愛知東邦大学 人間学部 子ども発達学科

(2008年11月12日受理)

新見公立短期大学カンボジア会の活動目的は、「1. 開発途上国を知り、国際的視野を身につける」「2. 国際協力について考える」「3. 専門職としての教養と感性を磨く」である。これらの目的を元に、学内活動およびカンボジアでの活動を行っている。そこで今回、開発途上国との国際交流が看護学生に与えた影響と教育効果を明らかにし、今後のカンボジア会活動への示唆を得ることを目的とした。結果、現地に行くことで学生が持っていたカンボジアのイメージは払拭され、アジア地域ならではの活気あふれる姿に好感を持つようになっていった。また気候や風土の違い、言語や文化の違いによる価値観の異なりを実感していた。そして専門職としての視点を持ちつつ、自分の考える国際協力を実践すること、また、東南アジア地域への関心を持ち続けることを期待できる学生の反応であった。これらのことより、カンボジア研修は活動目的を達成するものであるといえる。

(キーワード) 開発途上国, 国際交流, 学生, 教育効果

はじめに

新見公立短期大学カンボジア会（以下、カンボジア会とする）の活動目的は、「1. 開発途上国を知り、国際的視野を身につける」「2. 国際協力について考える」「3. 専門職としての教養と感性を磨く」である。学内での勉強会や講演会、またはカンボジア・スタディツアー（以下、カンボジア研修とする）を通して、この目的達成のための学習の機会を学生に提供している。

過去2回、2006年度を第1回目、2007年度を第2回目としたカンボジア研修では、国際協力への教育的意味を探ってきた。しかし、短い期間での海外研修で、学生の期待にこたえられているのか、また目的達成への限界はないのかなど課題も多い。2005年度に活動開始の準備として渡航したプレツアーの評価¹⁾、また学生の参加による第1回目のカンボジア研修の評価²⁾により、学生は現地に行くことで、私たち同行教員の予想を超えた学びを得ていることが明らかになっている。

今回は、カンボジア研修が、学生に与えている影響について評価することを目的に調査を行った。研修参加学生を対象に、研修終了後のアンケート調査を行った。また、1. カンボジアに関する感想、2. 日本についてどう感じたか、3. これから自分は何ができるか、の3つの

視点で学生にレポート提出を課した。これらのデータを下に、開発途上国との国際交流が学生に与えた影響と教育効果を明らかにし、今後のカンボジア会活動への示唆を得たいと考えた。

I. カンボジア研修の経過

1. 第1回目の成果

- 1) 研修期間：2006年1月5日～1月9日
- 2) 研修先：カンボジア シェムリアップ
- 3) 参加人数：学生1名（看護学科）、教員5名
- 4) 研修内容³⁾：孤児・地雷障害者・母子家庭・エイズ患者の支援プロジェクト、井戸掘り・ジャックフルーツ植樹プロジェクト、および職業訓練施設（子どもレストラン技能学校）を訪問して、現地NGOスタッフや現地の方と4日間を共にした。その他、公立の小学校と病院を訪問した。

2. 第2回目の成果

- 1) 研修期間：2007年1月5日～1月9日
- 2) 研修先：カンボジア シェムリアップ
- 3) 参加人数：学生12名（うち看護学科8名、幼児教育学科4名）、教員5名
- 4) 研修内容⁴⁾：現地の子どもたちとの交流（手洗い

*連絡先：岡 宏美 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

保健指導・レクリエーション)、NGO施設訪問、巡回診療への同行、ジャックフルーツ植樹、地雷博物館・キリングフィールド・アンコールワット・クメール織物研究所見学を実施した。

3. 第3回目の成果

- 1) 研修期間：2008年1月5日～1月9日
- 2) 研修先：カンボジア シェムリアップ
- 3) 参加人数：学生9名（すべて看護学科であり、1年6名、2年3名）、教員3名
学生参加者のうち2度目の参加が2名あった。
- 4) 研修内容（表1）：昨年の研修を踏まえ、また現地の状況の変化に合わせて日程の調整を行っている。今回は現地の子供たちとの交流時に「日本の紹介」と題して、学生が作成したポスターや写真などを用いて、プレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは地雷障害者支援センターと自立村の2箇所で行い、カンボジアと日本の文化の違いを実感する機会となった。

4. カンボジア研修のスケジュール

表1のようなスケジュールで研修を行っている。

II. 調査目的

カンボジア研修が、開発途上国との国際交流として看護学生に与えた影響と教育効果を明らかにし、今後のカンボジア会活動への示唆を得ることを目的とする。

III. 調査方法

1. 調査対象

2006年度および2007年度研修参加者 延べ27名。

2. 調査内容

- 1) アンケート調査：「この研修で最も興味深かったこと」、「あまり興味の持てなかったことや期待していた内容と違っていったこと」「ホテルについて」「この研修で、国際協力やNGO活動について学ぶことができたか」「この研修で他にやりたいことがあったか。他にどんなことをやってみたいか」「今後、国際協力について勉強していこうと思ったか」「この研修を通して、困ったことがあったか」「この研修を通して、改善してほしいことはあったか」「その他」の9項目。

- 2) 2007年度研修参加学生のレポート：「1. カンボ

表1 カンボジア研修スケジュール

日	月日	都市名	行 程
1	08年 1月 5日 (土)	関西空港発 ホーチミン着 ホーチミン発 シェムリアップ着	08:30 関西空港集合 関西空港よりホーチミンへ【所要5時間20分】 ホーチミンよりシェムリアップへ【所要1時間00分】 到着後、入国審査、レストランで夕食と説明会
2	1月 6日 (日)	シェムリアップ	午前：●CVSG地雷障害者支援センター視察 第1回プレゼン～「日本の紹介」 子どもたちと交流 午後：●現地医師、スタッフとともに巡回診療同行
3	1月 7日 (月)	シェムリアップ	午前：●CVSG第一自立村訪問 第2回プレゼン～「日本の紹介」 子どもたちと交流 午後：●カンボジア最大のジャックフルーツ園での植樹 アキラ地雷博物館見学 ●トンレサップ湖見学（道中、アンコール小児病院前通過）、市場で買い物
4	1月 8日 (火)	シェムリアップ発 ホーチミン着 ホーチミン発	午前：①キリング・フィールド、②アンコールトム、 ③タ・プロム見学 午後：④アンコールワット見学、⑤クメール織物研究所 市内市場見学 シェムリアップよりホーチミンへ【所要1時間20分】 ホーチミンより関西空港へ【所要5時間10分】

ジアに関する感想」、「2. 日本についてどう感じたか」、「3. これから自分は何ができるか」の3点。

3. 調査時期

研修終了後、学内反省会の際に調査用紙を個別に配布し、レポート課題とともに約1ヵ月後に回収した。

4. 倫理的配慮

アンケート調査については、配付時に任意であること、データとして処理し個人を特定しないことを口頭で説明した。またレポートについては、報告書としてまとめ公表することを目的としていること、研究で使用する際は個人を特定しないことを口頭で説明した。

IV. 結果および考察

1. アンケート調査の結果・分析

過去2年間の研修において、研修終了後に学生および教員に行ったアンケート調査をまとめた。

1) この研修で最も興味深かったこと。

カンボジア研修としてカンボジアを訪問し、NGO団体の協力の下、現地のボランティア施設を見学し、その施設で暮らす人々と周辺地域の子どもたちと交流した。また、カンボジアの歴史や文化を知るために、地雷博物館やアンコールワット遺跡見学も行った。その中で、印象の深かったものを表2に示した。

最も多かったのは、「NGO自立支援村見学」と「アンコール遺跡群見学」であった。NGOの運営するボランティア施設は、実際の国際協力活動の場として印象が強いと考える。また、アンコールワットは世界遺産に登録される有名な遺跡であり、カンボジアを象徴するものであるため、印象が深い。次に「現地の人達との交流」が多い結果となった。研修期間

表2 最も印象の深かった研修

項目	延べ人数
アンコール遺跡群見学	14
NGO 自立支援村見学	14
現地の人達との交流	13
NGO 地雷障害者支援センター見学	13
トンレサップ湖見学	8
地雷博物館見学	8
ジャックフルーツ園苗植え	5
巡回診療	5
紙芝居の保健教室	5
レクリエーション(2007年実施せず)	5
キリング・フィールド見学3	3
クメール織物研究所見学	1
その他(食事、悪路)	2

のうち、2回にわたり学内で準備したプレゼンテーション「日本の紹介」を行った。その後、子どもたちと一緒に遊ぶことを通して、直に触れ合う機会を持った。短い時間の中で、ボランティアを実践することは難しく、現地の人たちとの交流が唯一の研修実践であると言える。そのため研修の中でも印象深いのではないかと考える。その他、海外に来たと感じるものの印象が強いものが上位になっている結果となった。カンボジア会の活動目的は、「1. 開発途上国を知り、国際的視野を身につける」であり、この目的の他国を知るといふ部分は達成されていると考えられる。

2) あまり興味の持てなかったこと・期待していた内容と違っていただけ。

この質問に関しては、4項目挙げた(表3)。見学のみで終わる研修が多いことから、見学することの意味づけが難しかったようである。これは施設見学をする際に、見学の目的や意図を十分に説明する必要があった。また、できるだけ学生には体験型の研修方法を選択することが、今後の課題として残った。

表3 あまり興味が持てなかった研修

項目	延べ人数
クメール織物研究所見学	4
地雷博物館見学	1
ジャックフルーツ園苗植え	1
キリング・フィールド見学	1

3) 国際協力やNGO活動についての学び

ほぼ全員が学べたと答えており、短い研修期間の中で、現地での体験の重要性を感じる結果であった(表4、5)。

カンボジア会の学生メンバーは、国際協力やボランティアに非常に関心があり、実際に活動することを希望している。しかし、国際協力をしっかり行うには知識と技術、および時間的に不十分である。そこでこのカンボジア研修を会の目的である「2. 国際協力について考える」として位置づけ、具体的な支援の内容を考える機会としている。そして、「今の自分に何ができるのか」を考えることを促している。このことから2つ目の目的も達成されていると考えられる。

表4 国際貢献についての学び

項目	人数
十分学べた	5
学べた	11
あまり学べなかった	0
ほとんど学べなかった	0

表5 国際貢献についての学び (理由)

内容
実際に活動に参加して、日本と比較したりといろいろ学ぶことができた 事前にもっと勉強しておいたらよかった カンボジアが想像以上に発展していることを目の当たりにできた NGOの役割や援助内容が伝わった

4) 研修で実践したいこと

表6のように、施設見学についての希望がみられた。参加学生が看護学科・幼児教育学科の学生であるため、施設の見学として教育施設と病院施設の2つが挙げられている。また、より多くの現地の人との交流を求めており、これは今後の研修プログラムの改善点となる。

表6 研修で実践したいこと

内容
病院見学(3) 現地の生活の様子、衛生状態 小学校の授業風景 現地の人との交流(同じ専門職者・同世代の人・日本語を学んでいる人)

5) 今後、国際協力についての継続学習 (表7、8)

海外やボランティアへの興味関心は、現地に行くことでさらに深まっている。また、実際に現地でも活動している日本人ボランティアに接することで、「自分たちにできること」について考えるきっかけになっている。さらに、研修に参加することでカンボジアという国自体に親近感が湧き、繰り返し参加する学生も見られる。

表7 今後も国際貢献について勉強する

項目	人数
とても思った	9
思った	7
あまり思わなかった	0
思わなかった	0

表8 今後も国際貢献について勉強をしようと思った理由

内容
現地に行ってもっと興味を持ったから(3) 役に立ちたいから(3) 文化や考え方の違い、状況を直に感じられたから 今まで自分の国の事しか考えていなかった

2. 研修後のレポート

2007年度に参加した学生には、研修参加後の感想レポ

ートを求めた。課題は「1. カンボジアに関する感想」「2. 日本についてどう感じたか」「3. これから自分は何ができるか」の3点にまとめ分析した。『 』内は、学生のレポート³⁾を抜粋したものである。

1) カンボジアに関する感想

『カンボジアの人たちは皆、優しく親切でフレンドリーでユーモアがあっただけおもしろいなと思った。建物も思っていたよりきれいで近代的で、私のカンボジアのイメージとは大きくかけ離れていた。開発途上国と聞いていたもので、大きな建物とかはなくて、人々は飢えや貧困に苦しんでいるのかと思っていただけ、笑顔が絶えずなくて、貧乏でも楽しい、あたたかい国だった』

学生は研修前にカンボジアについての簡単な勉強会を開いて、多少の知識を持っていく。しかし、開発途上国へのイメージが悪く、実際に現地に行くまでの不安は大きいようである。学生個人のカンボジアのイメージは、現地に行くことで払拭され、アジア地域ならではの活気あふれる姿に好感を持つようになっていった。また、研修先であるシムリアップはアンコールワットを抱える観光都市であり、外資系ビジネスも入っており、開発途上ではあるが近代化の進む街である。学生は自分で見たカンボジアをそのまま受け入れ、さらに現地の人々と交流することで、カンボジア人の素直であたたかな人柄を知り、より好感を持ったという感想が多かった。

2) カンボジアに行ってみて日本について感じたこと

『日本にいれば自分の生活が当たり前のように感じるが、多くの国のなかの一国である日本で生活していて、自分は狭い世界しか知らないということをととても感じた。カンボジアは一人ひとりが生きることに一生懸命だということや、人との繋がりが強いと感じた。現地でも、カンボジアの実態を見て、日本は様々な面でとても豊かな国だと感じた。しかし、日本では色々なものの価値を感じることもなく豊かな生活が当たり前になってしまっているように思う。また、カンボジアに行くと生きるということや命というものを身近に感じることが多いと感じた。日本はカンボジアに比べ豊かな国だと思いが、人との繋がりがや、生きることについての意識などはカンボジアより弱く、今の日本はととても大切なことを感じることもなく生活しているように感じた』

『カンボジアの人の生活を見てみると時間がゆっくりと流れているような気がして、日本のせかせかした社会との違いを感じた。村での人々の暮らしや、子ども達をみていると写真でみた戦後の日本の風景を思い出した。今の日本のように便利なものはない生活だが、家族が一緒に、子どももそれぞれ役割をもって生活している。日本では見られなくなった生活が残っている気がして日本

とカンボジアは似ている気がした』

『日本にいと当たり前なことでもカンボジアではないものがたくさんあったが、見方を変えると日本の生活には無駄なものが多いのかもしれないと感じた』

『日本は世界でも発展している方だけど、人はカンボジアのように穏やかで自由ではないと感じた。日本にはお金やものがあるけど、それとは違う豊かさがカンボジアにはあると思った』

今回の研修では、海外に行くことでわかる「日本」を感じてもらいたいと考え、事前に学生たちには「カンボジアに行ってみて日本について感じたこと」テーマにレポートを書いてもらうことを知らせていた。現地での研修を進めていく中でも、「日本は恵まれている」「学校に行けることが幸せなんだ」と感想を漏らしていた。これらのことから、同じアジアに属する日本とカンボジアの生活水準の違いを肌で感じ、さらに学生自身の生活環境についても考えさせられている。

そして、気候や風土の違い、言語や文化の違いによる価値観の異なりを痛感している。自分の価値観で他者や他国を判断することの誤りに気づき始めていると感じられる。

3) これから、自分は何かができるか

『今自分に出来ることと考えると難しく、何かできることがあるのだろうかと思う。今回の研修旅行を通して、世界にもっと目を向けてまずは現状や歴史などを知ることが自分には必要だと感じた。興味をもつだけでなく、勉強していかなければならないと感じた。色々なことを知っていく中で自分に出来ることを探すことが今の自分にできることだと思う』

『カンボジアがどんな国なのか、カンボジア人がどのような人間なのかを知ることができた。今までは、想像で自分が何をできるのか考えてきたけど、実際に自分の目で見てみて、何をすることが出来るのだろうと思った』

『まず、服を着てない子がいたという点でやはり古着を支援することが大事だと思う。

次にこの目で見てきたカンボジアの現状を、クラスの友達や両親、兄弟などに話して、カンボジアのことを少しでも多くの人に伝え、知ってもらい、カンボジアのこれからについて一緒に考えていきたい』

『いつか保健指導や病気の人の看護をしに行けるといいなと思う。ワクチンを打ってはいけなければならない病気や治るはずの病気で亡くなってしまう人を少しでも救いたい。今は知識が少なくて何が出来るかあまり思いつかないので、本や雑誌や新聞などを読んで、開発途上国のことへの理解をもっと深めて自分に出来ることを考えていきたい』

『二回目のカンボジアは、考えることも多かった。何

回行っても「もう一度行きたい」と思える場所だと思った。ただ、物やお金をあげるだけではいけない、ということから自分はなにができるのかと、ずっと考えていたが、答えを最後まで見つけることができなかった。その答えをこれからも探求していきたいと思った』

学生たちは、自分たちがまだまだ学習途上であることを痛感している。この研修をきっかけに教育を受けられることの有り難さとともに、看護職としての専門性が途上国支援の大きな役割となることを知り、自らの学習意欲を高めていくことに期待する。また、途上国支援としての看護職の役割に気づくことが、目的の「3. 専門職としての教養と感性を磨く」につながっていくと考える。

そして、専門職としての視点を持ちつつ、自分の考える国際協力を実践すること、また、東南アジア地域への関心を持ち続けることを期待できる学生の反応であった。

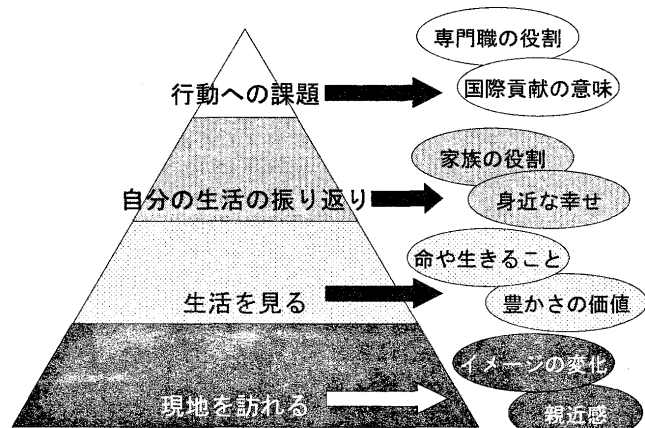


図1 研修参加による学生の気づき

4) 学生に与える「きっかけとしての研修」

学生たちは非常に感性が豊かであり、個々にさまざまなことを感じていることが良く分かった。この研修の最大の効果は、東南アジアは不潔で怖い地域であるというイメージをなくし、また行きたいと思えることなのかもしれない。研修はただのきっかけであり、開発途上国への興味を持ち、国際協力へ近づくための第1歩であると思われる。

また、カンボジアの国の状況は深刻であり、それを考えると何もできないことへの罪悪感が大きくなってしまふ。たった3日間の研修でできることなど何もない。けれど、学生たちは現地の人々と交流し、ボランティアの実際を見聞し、国際協力の必要性やそのやり方、国際協力の考え方について学生それぞれが考え始める。そして、それが今の自分ができることを考える機会になればと思っている。当たり前のように育ち学校へ通っていることの幸せを、学生たちは感じているのである。さらに海外に出ることで、自分の生まれた国について考えるようになる。日本とカンボジア二つの国のことを考えただけで

も、国際的視野を手に入れたことになるのではないだろうか。

V. 研究の限界と課題

今回の研究では、対象者の人数が少ないため研修の成果を一般化することはできない。また、「3. 専門職としての教養と感性を磨く」の部分の研修が、現地で思うように実践することができず、現状を見学するのみで終わっている。これは研修参加学生が、1, 2年生を中心としており、専門的な技術を取得していないことが挙げられる。しかし、現地の子どもたちと交流する機会を持つため、それを有効に利用し、1, 2年生でも実践できる研修の工夫が必要であると考えられる。

さらに、学生からは「同年代の人との交流をしたい」との意見もあり、カンボジアで暮らす同世代の若者との交流から、学生自身の生活や文化に関する振り返りがより深まるのではないかと思われる。また可能であれば、専門職を学ぶ同世代のカンボジア学生との交流ができる研修項目を考えていきたい。

引用文献

- 1) 岡本亜紀・岡宏美・杉本幸枝他：学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して—カンボジア研修報告一，新見公立短期大学紀要，27，187-197，2006.
- 2) 岡本亜紀・岡宏美・杉本幸枝他：学生ができる国際貢献—2006年度カンボジア研修報告一，新見公立短期大学紀要，28，183-189，2007.
- 3) カンボジア・スタディツアー—2007 報告書
- 4) カンボジア・スタディツアー—2006 報告書

Students' learning through international exchanges with a developing country: The educational effects of a study tour in Cambodia

Hiroimi OKA, Naoyuki OKAMOTO, Yukie SUGIMOTO, Aki OKAMOTO, Seijiro YATO, Sachiko KOJO

Summary

The missions of the Cambodia Circle of Niimi College are: 1) to understand developing countries and acquire global viewpoints, 2) to reflect on international cooperation, and 3) to refine professional intelligence and sensibilities. To achieve these goals, the circle is engaged in activities both on campus and in Cambodia. This study aimed to evaluate the impacts and educational effects of international exchanges with the country on nursing students who participated in a study tour there, and obtain suggestions for future activities of the circle. It was found that the students' previously inaccurate images of Cambodia were dispelled by visiting the country, becoming attracted by active lifestyles characteristic of certain Asian nations. They also became aware of the diversity in values stemming from differences in the climate, language, and culture between both countries. Furthermore, they behaved in a way we would expect of them to practice their own global cooperation from a professional viewpoint, and maintain their interest in Southeast Asia. These observations indicate that the study tour in Cambodia fulfills the circle's missions.

Key words: a developing country, international exchanges, student, educational effects